

出題分析			
試験時間	募集要項参照	配点	募集要項参照
		大問数	3 題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]		難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
概 評 —— 出題の特徴・特記事項			
<p>例年、出題方式は誘導文による空所補充形式であり、解答方式は記述式とマークセンス方式の併用である。例年大問〔Ⅲ〕で波動、熱力学、原子物理の中から2つの分野が出題されており、今年度の内容は昨年度に引き続き、波動と原子であった。全体的な内容は、例年通り、基本的な設問が多く、計算の負担も少ないため、取り組みやすかっただろう。例年の特徴としては誘導が丁寧な分、制限時間に対して問題文が長めである。また、設問数もやや多いため、迅速かつ確実な処理能力が必要となる。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	力学 等加速度運動 衝突 単振動	(i) はテニスボールを打ち返す設定で等加速度運動についての問題が出題された。 (ii) は質量の異なる小球同士の衝突を扱い、片方の小球はばねに取り付けられているため、衝突後に単振動を行う。小球同士の繰り返しの衝突が起きる。	標準
II	電磁気 抵抗率 導体棒の運動による 電磁誘導	(i) は導体中の自由電子が受ける力に注目し、抵抗率を求める内容であった。仕事率は、力×速度で求めることができる。 (ii) は導体棒が磁場中で運動する問題で、前半は抵抗が接続された回路、後半はコイルが接続された回路を考える。	標準
III	波動 弦の振動 原子 原子核の構造 放射線	(i) は波動から、弦の振動について出題された。弦を伝わる波の速度、振動数、波長のうち何が変わっているのかを見極めよう。 (ii) は原子分野からの出題で、用語を中心に基礎的な内容が問われた。また、数値の計算問題もあった。	標準

設問構成 (設問数・形式・内容)								
大問 番号	設問数 (枝問総数※1)	選択式 枝問数	記述式 枝問数	語句 (空所補充) (一問一答)	計算	論述	描図※2	その他
I	18問 (18)	15	3	4	14	0	0	
II	15問 (15)	12	3	2	13	0	0	
III	18問 (18)	15	3	8	10	0	0	

※1 「枝問総数」は各設問 (小問) に含まれる枝問も個々に数えた場合の全設問 (小問・枝問) の総数。
設問形式・設問内容別の設問数も、これと同様の方法で算出した。

※2 グラフ・図を含む。

合格のための学習法
<p>関西大学の入試では、基礎から標準的な内容が問われる。教科書の内容について問われていることが多いため、まず、教科書に示された基本的な物理現象の理解につとめ、その後は、標準問題集でひたすら演習を積むようにしよう。公式が導かれた過程を理解している受験生でなければ解けないような問題も出題されることがあるため、暗記のみに頼った勉強は避けてほしい。参考書などを用い、わからないことは質問して、現象の根幹を理解するように努めよう。また、入試問題を解くことは時間との戦いでもある。最初に問題がスムーズに解けることは重要であり、全体の問題を確認して、解きやすい問題から解くというのが、入試問題を解く上での重要なポイントであるといえる。</p>